外来語における[ei]の表記のゆれ

小椋秀樹（立命館大学文学部）

Orthographic Variation of [ei] in Loanwords

Hideki Ogura (College of Letters, Ritsumeikan University)

要旨

本稿の目的は、原語で二重母音[ei]を含む外来語を取り上げ、その二重母音が長音として長音符号で表記されるか、連母音で表記されるかという表記のゆれの実態を明らかにすることである。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の出版サブコーパスの書籍、雑誌、新聞、特定目的サブコーパスの知恵袋、ブログを資料とし、それぞれのサブコーパスで頻度 100 以上の語を対象に表記のゆれの実態を調査した。その結果、両サブコーパスとも長音符号による表記が約 9 割を占めること、表記のゆれにはレジスター差が見られること、長音符号による表記と連母音による表記とで意味・用法に違いの見られる語があることなどを明らかにした。

１．はじめに

本稿は、小椋(2013、2014)に続き、大規模コーパスを活用して外来語表記のゆれの実態を解明しようとするものである。

小椋(2013)は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ とする。)のコアデータ[1]を資料として、外来語表記にどのようなゆれがあるか見通しを立てようとしたものである。この調査では、外来語表記のゆれの割合には、レジスターによる差異が見られることを明らかにした上で、各レジスターにおいて、具体的にどのような外来語表記のゆれが見られるのかなどについても調査を行った。その結果、長音に関する表記のゆれが最も多く、全てのレジスターに見られることを明らかにした。

小椋(2013)で指摘した長音に関する表記のゆれには、大きく分けて二つの種類がある。一つは、語中・語末長音を長音符号で書くか省くかというゆれである。例えば、「コンピューターーコンピュータ」「マネージャー・マネージャーマネジャー」が挙げられる。もう一つは、長音符号で書くか連母音で書くかというゆれである。例えば、「プレーヤーープレイヤー」が挙げられる。

前者については、小椋(2014)で BCCWJ の出版 SC、特定目的 SC・知恵袋、同・ブログを資料として実態調査を行った。そこで本稿では、長音符号で書くか連母音で書くかというゆれを取り上げることとし、その中でも特に、原語で二重母音[ei]を含む外来語に着目する。

原語の二重母音[ei]をエ段長音として長音符号で書くか、連母音で書くかについては、外来語の表記の基準を考える際に問題となることが多い。この表記の問題は、そもそも原語の[ei]を、日本語の音韻体系に合わせて長音[e:]で取り入れるか、原語の発音に基づいて母音連続[ei]で取り入れるかという発音のゆれに起因するものである。

国語審議会は、1952 年に術語・表記合同部会の報告として「外来語の表記について」を

[1] BCCWJ の設計等については、前川(2008)、山崎(2011)を参照。

公表した。ここでは、原語の二重母音[ei]について、

なお、原語における二重母音「エイ」「オウ」は長音とみなす。

ショー(show)　メーデー(May Day)

〔例外〕　エイト(eight)　ペイント(paint)

とあり、長音として取り入れられているという立場から、表記の基準を示している。現在の外来語表記の基準である『外来語の表記』(1991 年、内閣告示第 2 号、同訓令第 1 号)でも、

3　長音は、原則として長音符号「ー」を用いて書く。

〔例〕　(前略)　ゲーム　ショー　テーブル　パーティー (以下略)

注 2　「エー」「オー」と書かず、「エイ」「オウ」と書くような慣用のある場合は、それによる。

〔例〕　エイト　ペイント　レイアウト　(以下略)

とあり、「外来語の表記について」の考え方が継承されている。

しかし近年、原音に基づいて連母音で書こうとする傾向が見られ、表記の基準を改定したものもある。例えば、読売新聞社(2011)では「メーンイベント」(main event)と、『外来語の表記』の原則に基づき長音符号で書き表していたのを、読売新聞社(2014)では「メインイベント」と、連母音による表記に改めた。また、NHK 放送用語委員会における議論の概要をまとめた塩田(2006)によると、NHK では原語の二重母音[ei]について長音表記を本則としているが、近年、一般社会において連母音による表記が増えているため、この本則を再検討する必要があるとして検討事項に上がっている。

このような現代における外来語表記の問題を踏まえ、本稿では、原語で二重母音[ei]を持つ外来語を取り上げ、BCCWJ を資料として表記のゆれの実態を明らかにする。

以下、2 節で先行研究を概観した後、3 節で調査資料とするレジスター、調査対象とする語の範囲について述べる。4 節で調査結果を報告し、最後に 5 節で本稿をまとめる。

なお、本稿では、語の表記を示す際には、「プレーヤー」のようにかぎ括弧を付けて示し、語を示す際には《プレーヤー》のように二重山括弧を付けて示す。また、長音符号による表記を長音表記と、連母音による表記を連母音表記と呼ぶ。

２．先行研究

ここでは、本稿の調査に関連する先行研究を見ていくこととする。まず実態調査に基づくものとして宮島、高木(1984)、佐竹(1986)、荻野(2014)を取り上げる。また、長音表記か連母音表記かという表記のゆれには、長音で発音しているか、連母音で発音しているかという語形のゆれの問題が関係する。そこで、外来語における[ei]の発音のバリエーションを調査した岡田(2004)を取り上げる。

宮島、高木(1984)は 1956 年発行の雑誌 90 種を対象とした外来語表記のゆれに関する調査報告である。佐竹(1986)は、当時、国の基準が示されていなかった外来語の表記の問題点について、国立国語研究所(1983)[2]を手がかりにしながら述べたものである。宮島・高木(1984:55)は、「2 重母音という意識があるとき」に連母音表記が取られるとし、佐竹(1986:417)は、長音表記ではなく連母音表記が取られるのは「長音でないという意識が強いことの証明であり」、「そのような意識が強いというならば、長音符号と母音表記との対立は、もはや長音表記のしかたのゆれではなく、発音のゆれの問題である」と述べる。

[2] 1966 年発行の朝日・毎日・読売 3 紙を対象とした語表記のゆれに関する調査である。

荻野(2014)は、Web をコーパスとして利用した研究で、《テークアウト》《クラスメート》など 20 語を対象に、外来語における[ei]が長音表記されるか、連母音表記されるか調査している。その結果、長音符号による表記が圧倒的に多いこと、長音表記か連母音表記かは語ごとに決まっており、同程度で表記がゆれている語は見られないこと、古い時代に日本語に入ってきた語は、長音表記される傾向にあることを述べる。また、「ネーム」と「ネイム」とを取り上げ、前者は会社名、商品名に使われることが多く、後者は全体的に曲名での使用が多いことを示し、長音表記と連母音表記とで意味・用法に差異のあることを明らかにしている。

次に、外来語における母音連続[ei]の発音に関する岡田(2004)を見ていく。岡田(2004)は、『日本語話し言葉コーパス』を資料として、原語で二重母音[ei]を持つ語が外来語として日本語に取り入れられる際に、二重母音を長音[e:]で取り入れるのか、母音連続[ei]で取り入れられるのかを調査したものである。その結果、[ei]で発話されるのは約 7%にとどまり、「長母音[e:]で実現される傾向を認めることができる」(p.37)と述べる。また、どのような場合に[ei]となるのかについても調査し、/ei/＋/N/という音節構造の場合に[ei]で実現される傾向にあることを明らかにしている。また、語のなじみ度も緩やかに関係している可能性があると指摘している。

以上、本稿に関連する先行研究を概観した。原語の[ei]について、発音の面では長音で実現される傾向にあり、表記の面では長音表記が圧倒的に多く、長音表記か連母音表記かは語ごとに決まっているという指摘は、重要なものである。ただ、荻野(2014)の調査対象は 20 語と少なく、Web を利用しているためレジスターによる差異の有無についても明らかにはされていない。宮島、高木(1984)、佐竹(1986)は、大規模言語調査に基づく研究ではあるが、いずれも単一のレジスターを対象としたものであり、そもそも現在から約 50 年～60 年前の言語調査を基にしているという問題もある。

このような研究の現状から、原語で二重母音[ei]を持つ外来語の表記については、多様なレジスターを資料にして、より現在に近い時期の実態を明らかにする必要がある。そこで本稿では、多様なレジスターを収録している BCCWJ から出版・書籍、同・雑誌、同・新聞、及び特定目的・知恵袋、同・ブログの各レジスターを資料として、外来語における[ei]の表記のゆれの実態を計量的な手法によって明らかにしていく。具体的には、外来語における[ei]の表記が長音表記か連母音表記かを調査し、レジスターによる差異を明らかにする。さらに、意味・用法の面からも表記のゆれの傾向を見ていくこととする。

３．調査資料・調査対象

３．１　調査資料

表記の問題を取り上げる際、注意しなければならないのは、表記の基準や校閲の存在である。1 節で述べたとおり、外来語の表記には、国が定めた基準である『外来語の表記』がある。この基準に従って表記の統一を図った場合、本稿で取り上げている外来語の[ei]という音については、長音表記で統一されることとなる。また、著者のほかに編集者等による校閲があれば、ゆれが抑制される可能性もある。

このような点を踏まえて、本稿では、BCCWJ に収録されたレジスターの中から、出版・書籍、同・雑誌、同・新聞と特定目的・知恵袋、同・ブログとを資料とすることとした。出版 SC の各レジスターは程度の差はあるものの、編集者の校閲が想定される。新聞については、『外来語の表記』を基に各社が表記の基準を設け、表記の統一を図っている。それに

対して、特定目的 SC の知恵袋、ブログ(以下、まとめて呼ぶ場合は Web とする。)は、どのような表記を取るかは著者の自由である。

BCCWJ は、言語単位として長単位と短単位の 2 種類を採用している[3]。今回の調査には、そのうち短単位を用いた。各レジスターの延べ語数を表 1 に示した(短単位の語数。記号、補助記号、空白は除く。)。

表 1：各レジスターの延べ語数

レジスター	延べ語数	レジスター	延べ語数
出版・書籍	28,552,283	特定目的・知恵袋	10,256,877
出版・雑誌	4,444,492	特定目的・ブログ	10,194,143
出版・新聞	1,370,233		

３．２　調査対象

本稿では、原語で[ei]という音を含む外来語から、次のように調査対象を絞り込んだ。

出版 SC と Web とでは、出現する語に違いが見られることが予想される。そこで、出版 SC と Web とを別々に集計した上で、それぞれで頻度 100 以上の語を対象とすることとした。ここで頻度 100 以上としたのは、語別に表記のゆれの状況を把握するため、偏りが生じやすい生起頻度の低い語は除くのが適切だと判断したことによる。また、固有名詞を除く一般語を対象とすることとした。

用例の収集に当たっては、短単位データ 1.0.0 を対象に、『中納言』1.1.0 で、語彙素に片仮名表記のエ段長音を含むもの(検索条件：%[エケセテネヘメレゲゼデベ]ー%)を検索した。検索結果を基に、頻度 100 以上の語(固有名詞を除く。)に絞り込んだ上で、更に原語で[ei]という音を含むものを抽出した。その結果、出版 SC では 101 語、Web では 71 語が対象となった。

４．調査結果

４．１　[ei]の表記のゆれ

本節では、原語における二重母音[ei]の表記の実態について、レジスター別に見ていく。

原語の二重母音[ei]について、長音表記、連母音表記がそれぞれどの程度用いられているのかを、表 2 にまとめた。表 2 では、長音符号による表記、連母音による表記の度数と、それぞれの表記が占める割合とを示した。

出版 SC 全体では、長音表記が 89.2%、連母音表記が 10.8%で、長音表記が圧倒的に多い。この傾向は、Web でも同様であり、長音表記が 90.9%、連母音表記が 9.1%となっている。原語における二重母音[ei]は、長音表記で定着しているといえる。岡田(2014)で明らかにされているとおり、話し言葉では原語の[ei]は長音で実現される傾向にある。長音表記が圧倒的に多いのは、話し言葉において長音が圧倒的に多いことによると考えられる。

レジスター別に見ても、長音表記が圧倒的に多いことに変わりはないが、若干の差異を認めることができる。連母音表記の割合を見ると、出版 SC では、雑誌が 13.7%で最も高く、次いで書籍が 10.0%である。一方、新聞は最も低く 5.6%にとどまる。特定目的 SC では、ブログが 11.6%で 1 割台であるが、知恵袋は 7.0%と低い。新聞において連母音表記の割合が

[3] BCCWJ における言語単位の概要、単位認定基準については、小椋、小磯、冨士池他(2011)を参照。

低いのは、『外来語の表記』に基づき長音表記で統一を図っていることによると考えられる。

表 2：外来語における[ei]の表記(延べ)

	長音	連母音	総計		長音	連母音	総計
出版	47283	5739	53022	Web	36975	3700	40675
	89.2%	10.8%	100.0%		90.9%	9.1%	100.0%
出版・書籍	33143	3667	36810	特定・知恵袋	20645	1553	22198
	90.0%	10.0%	100.0%		93.0%	7.0%	100.0%
出版・雑誌	12402	1969	14371	特定・ブログ	16330	2147	18477
	86.3%	13.7%	100.0%		88.4%	11.6%	100.0%
出版・新聞	1738	103	1841				
	94.4%	5.6%	100.0%				

語別に見た場合、ゆれの見られない語もあれば、長音表記、連母音表記のいずれかに偏る語や、二つの表記が同程度に用いられている語が見られる。そこで、ゆれの程度に応じた分類を試みることとする。まず、ゆれの見られない語を「固定」、一方の表記が 8 割以上を占めている語を「独占」、それ以外を「ゆれ」と呼ぶこことする[4]。それぞれの分類に属する語数(異なり)を出版 SC、Web ごとに集計したのが表 3 である。

表 3：「固定」「独占」「ゆれ」と語数(異なり)

	固定	独占	ゆれ	総計
出版	52(3)	38(6)	11	101
	51.5%	37.6%	10.9%	100.0%
Web	46(1)	22(6)	3	71
	64.8%	31.0%	4.2%	100.0%

「固定」「独占」の括弧内の数字は、連母音表記で固定している(連母音表記が 80%以上を占める)語の数である。出版 SC では「固定」に分類される 52 語のうち 3 語が連母音表記で固定している。

出版 SC、Web とも表記にゆれのみられない「固定」が最も多いことがわかる。出版 SC では 52 語(51.5%)、Web では 46 語(64.8%)といずれも過半数を占めている。「独占」が共に 3 割台で続いており、異なりで見た場合、9 割前後の語がほとんど表記にゆれが見られず、また長音表記が圧倒的に優勢であることが分かる。

「ゆれ」に分類される語、「独占」に分類される語のうち連母音表記に偏る語、「固定」に分類される語のうち連母音表記で固定している語を連母音表記の割合とともに示したのが、表 4 である。出版 SC では 20 語、Web では 10 語となっている。

表 4 を見ると、Web で「ゆれ」に分類される《デー》《プレーヤー》《プレー》の 3 語は、出版 SC でも「ゆれ」に分類されている。表記の基準や校閲の有無といったレジスターの性格にかかわらず、現代においてまさに表記のゆれている語といえる。

連母音表記で固定している語、及び連母音表記が 8 割を超える語は、出版 SC と Web と

[4] この 3 区分は、1956 年発行の雑誌 90 種を対象に、語表記のゆれを調査した宮島(1997)を参考にしたものである。ただし宮島(1997)は、「独占」を「特定の形式が 9 割以上をしめているもの」(p.103)としており、本稿と異なる。

で共通するものがある。《ディスプレー》《メーク》《ネール》《リメーク》《メーン》《メード》《ブレーク》の 7 語が挙げられる。今回の調査では頻度 100 以上の比較的高頻度の語を対象としていることも関係していると思われるが、専門用語というよりは一般語に属する語が多く見られる。これらは、現代において、『外来語の表記』の原則とは異なる表記で定着している語群ということになる。

表 4 :「ゆれ」に分類される語、連母音表記が優勢である語

出版SC			Web		
語彙素	原語	連母音率	語彙素	原語	連母音率
プレー	play	40.1%	デー	day	28.8%
プレーヤー	player	43.2%	プレーヤー	player	43.6%
クラスメート	classmate	53.8%	プレー	play	50.8%
テーク	take	56.3%	ディスプレー	display	88.4%
メーク	make	57.6%	メーク	make	91.1%
デー	day	58.4%	ネール	nail	93.6%
ディスプレー	display	71.3%	リメーク	remake	94.1%
エッセー	essay	75.5%	メーン	main	98.4%
トレー	tray	75.7%	メード	made	98.9%
ウエート	weight	79.4%	ブレーク	break	100.0%
ハイウエー	highway	79.6%			
ウエートレス	waitress	87.6%			
テースト	taste	89.5%			
メーン	main	91.8%			
ネール	nail	96.7%			
ウエー	way	97.1%			
ネービー	navy	99.3%			
ネーティブ	native	100.0%			
ブレーク	break	100.0%			
メード	made	100.0%			

４．２　意味・用法と[ei]の表記

荻野(2014)では、長音表記と連母音表記とで意味・用法に差異のあることが指摘されている。本節では、この指摘を受け、出版 SC で「ゆれ」に属する語の中から、《ディスプレー》《メーク》の 2 語を取り上げ、意味・用法と表記との関係などについて検討する。なお、適宜、Web の調査結果と対照して見ていく。

（１）ディスプレー

《ディスプレー》は、[1] 展示すること、陳列すること、 [2]コンピューターの出力表示装置(モニター)という二つの語義を持つ。その例を次に示す。

(1) あんまり綺麗にディスプレイできないので(OC14_08488)

(2) コンピューターのディスプレイから目を離さずに(PB29_00337)

そこで、これらの語義と[ei]の表記との間に関係があるか否かを見ることとする。その結果を表 5 にまとめた。表 5 では、各語義における長音表記、連母音表記の頻度(割合)を示した。出版 SC だけではなく、Web も併せて示した。

表 5 を見ると、出版 SC、Web とも、どちらの意味においても連母音による表記の割合が高いことが分かる。しかし、「陳列・展示」の意味よりも「モニター」の意味の方が連母音

による表記が用いられる割合が高い。出版 SC では約 8 割が、Web では約 9 割が連母音による表記である。

両語義とも連母音表記の割合が高いが、特に「モニター」の意味で用いられた場合に、連母音表記となる傾向が強い。

表 5 :《ディスプレー》の意味と表記

		長音		連母音		総計
出版	モニター	55	20.8%	210	79.2%	265
	展示・陳列	63	42.9%	84	57.1%	147
Web	モニター	6	9.8%	55	90.2%	61
	展示・陳列	9	27.3%	24	72.7%	33

（２）メーク

《メーク》は、出版 SC に 813 例用いられており、そのうち 763 例が美容・ファッション関係での用例であった。例えば、次のような例である。

(3) そんなわけでふだんはノーメークに近いのだとか。(PB4n_00148)

(4) 今年はちょっと大人っぽく見せるメイクがイチオシ。(PM21_00527)

その他の例は、《メークドラマ》《スコアメーク》《チャンスメーク》のような用法である。

美容・ファッション関係での用例を対象に長音表記、連母音表記の頻度(割合)を調査した結果を表 6 に示した。

表 6 :《メーク》の表記(ファッション・美容関係)

	長音		連母音		総計
出版	332	43.5%	431	56.5%	763
Web	28	5.6%	472	94.4%	500

表 6 を見ると、出版 SC では、長音表記が 43.5%、連母音表記が 56.5%であり、連母音表記が優勢ではあるものの、その差は余り大きくない。まさに表記がゆれているといえる。なお、《メーク》は出版・新聞に 8 例(いずれも長音表記)しか出現しないので、出版・新聞の影響により、長音表記の頻度が高くなっているわけではない。

一方、Web では連母音表記が 94.4%を占めている。出版物ではゆれが生じているが、Web のような個人が自由に表記を選択できるレジスターでは連母音表記が定着していると考えられる。

５．終わりに

本稿では、BCCWJ の出版・書籍、同・雑誌、同・新聞と特定目的・知恵袋、同・ブログを資料として、原語で二重母音[ei]を含む外来語を対象に、[ei]が長音表記されるか連母音表記されるかについて実態調査を行った。その結果、次のことが明らかとなった。

(5)・[ei]の表記は、長音表記が圧倒的に多く、出版 SC、Web とも長音表記が約 9 割を占める。ただし、長音表記、連母音表記のゆれには、レジスター差も若干認められる。

・《ディスプレー》は、意味・用法によって連母音表記の割合に差がある。また美容・

ファッション関係で用いられる《メーク》は、表記のゆれにレジスター差がある。

本稿では、上に述べたように長音表記が圧倒的に多いという結果が得られたが、これには、調査対象を頻度 100 以上の語に限定したことが関わっている可能性も考えられる。つまり、既に一般語化しているため、原語の二重母音[ei]が日本語の音韻体系に合わせて長音として取り入れられ、長音符号による表記が取られているとも考えられるのである。佐竹(1986)には、最近使われ出した語に連母音表記が見られるという指摘がある。今後、低頻度も含めて[ei]の表記の実態を調査する必要がある。

謝　辞

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト(基幹型)「コーパス日本語学の創成」(リーダー：前川喜久雄)、同「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」(リーダー：相澤正夫)、JSPS 科研費「大規模コーパスに基づく現代語表記のゆれの実態解明」(代表者：小椋秀樹)による補助を得た。

参考文献

岡田祥平(2004)「『日本語話し言葉コーパス』に観察される母音連続/ei/のバリエーション ―外来語の場合―」『電子情報通信学会技術研究報告〔音声〕』104-148、pp.35-40.

荻野綱男(2014)『ウェブ検索による日本語研究』、朝倉書店.

小椋秀樹(2013)「現代日本語における外来語表記のゆれ」相澤正夫(編)『現代日本語の動態研究』、おうふう、pp.151-171.

小椋秀樹(2014)「外来語語末長音の表記のゆれについて」『論究日本文学』100、pp.195-208.

小椋秀樹、小磯花絵、冨士池優美、宮内佐夜香、小西光、原裕(2011)『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第 4 版(上・下)』(国立国語研究所内部報告書 LR-CCG-10-05-01、LR-CCG-10-05-02).

佐竹秀雄(1986)「外来語表記法の問題点」宮地裕(編)『論集 日本語研究(1) 現代編』、明示書院、pp.407-422.

塩田雄大(2006)「外来語の発音とカタカナ表記 ～ [エイ・ケイ・セイ]などを中心に ～」『疱瘡研究と調査』56-3、pp.74-75.

前川喜久雄(2008)「KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の開発」『日本語の研究』4-1、pp.82-95.

宮島達夫(1997)「雑誌九十種表記表の統計」、『日本語科学』1、pp.92-103.

宮島達夫、高木翠(1984)「雑誌九十種資料の外来語表記」『研究報告集』5(国立国語研究所報告 79)、pp.43-76.

山崎誠(2011)「第 2 章 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の設計」、国立国語研究所コーパス開発センター『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引き』第 1.0 版、pp.113-20.

読売新聞社(2011)『読売新聞用字用語の手引き　第 3 版』、中央公論新社.

読売新聞社(2014)『読売新聞用字用語の手引き　第 4 版』、中央公論新社.

関連 URL

「国語施策情報」　http://kokugo.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/joho/index.html